日中慣用句における「手」の意味拡張

呉　琳

要旨　本稿では、「手」を含む日中慣用句を取り上げ、「手」の意味拡張に注目し、その拡張のプロセスを明らかにしていくと同時に、両言語の共通点と相違点を詳しく考察する。分析した結果、日本語の慣用句の「手」には、〈労力〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈関わり合うこと〉〈所有すること〉などの意味がある。一方、中国語の慣用句の「手」には、〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈手元〉〈支配下〉などの意味がある。両言語の間には異なる意味が見られるが、身体部位を表す「手」から〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉へと意味が拡張されることは共通している。つまり、「手」は行為のフレームに基づき、何らかの行為に用いる道具を表すことから、メトニミーによってその行為を行う人、その行為に要求される方法、その行為に要求される能力や技術を表しており、両言語において、拡張のプロセスは同じである。

キーワード　手　慣用句　意味拡張　行為のフレーム　日中対照

日汉惯用语中“手”的语义扩展

提要　本文考察日汉“手”类惯用语中“手”的语义扩展，在此基础上探讨两者之间的异同。结果表明，日语惯用语中的“手”含有〈劳动力〉、〈手段、方法〉、〈本领〉、〈与……相关〉、〈拥有〉等意，汉语惯用语中的“手”含有〈人〉、〈手段、方法〉、〈技能、本领〉、〈手头〉、〈所控制掌握的范围〉等意。两种语言中，惯用语的构词要素“手”所涉及的语义存在差别，但从表示人体部位这一原意引申为表示〈人〉、〈手段、方法〉、〈本领〉，其语义扩展所遵循的规律相同。如果我们将行为看成是由行为所使用的工具、行为人、行为所需要的方法、行为所需要的能力和技术等要素构成的框架，那么“手”一词则是

基于行为框架，由表示行为所使用的工具这一语义通过转喻扩展成行为人、行为所需要的方法、行为所需要的能力和技术之意。

关键词　手　惯用语　语义扩展　行为框架　日汉对比

はじめに

慣用句[1)]に関する日中対照研究はこれまでに多くなされてきた（呉琳 2016）。特に両言語において身体部位詞が慣用句に多用されているため、身体部位詞を含む慣用句を取り上げる研究がよく見られる。例えば、盧小英（2010）は「手」を含む慣用句が表す意味のニュアンスをプラス、マイナス、中立に分類し、両言語の共通点と相違点について文化的な観点から考察している。しかし、同氏の研究では、「手」の派生した様々な意味については、慣用句の羅列にとどまっており、詳述されていない。

そこで、本稿では「手」を含む日中慣用句を取り上げ、学習者がこれらの慣用句の理解に向かう手助けとして、「手」の意味拡張を分析し、その拡張のプロセスを明らかにすると同時に、両言語の共通点と相違点を詳しく考察していく。

1．慣用句における「手」の意味拡張

「手」の多義性は日本語と中国語の辞書における意味記述から確認できる。原義としての「手」は人間の腕の末端にある器官、または動物の前足を指す。この身体部位詞としての意味は両者の間で対応しているが、両言語にお

1）中国語では「慣用語」や「習語」という概念が用いられている。慣用句の定義をめぐって様々な議論がなされているが、意味上ひとまとまりになっている固定的な連語であることは両言語の間で共通している。また位置づけからみると、成句の下位分類をなしていることも両言語で共通している。従って、本稿では、両言語の慣用句を対等の概念として扱い、対照分析を行う。

いて原義に基づいて様々な転義が生じてきた。王麗莉（2007）は、両言語の「手」の意味拡張を認知言語学のアプローチから考察している。同氏によると、中国語の「手」が単純語として使われる時、ほとんどの場合は原義を指すが、形態素として複合語を構成する時、メタファーやメトニミーに基づく意味拡張が起こる。これに対して、日本語の場合は、形態素として複合語を構成する時だけでなく、単純語の時も意味が拡張するのである。従って、本稿では、より包括的な意味分析を行うために、単純語の「手」を構成要素に持つ慣用句と、形態素として使われる「手」を構成要素に持つ慣用句の両方を対象として取り扱うことにする。両言語の慣用句は、それぞれ宮地裕『慣用句の意味と用法』（1982年、明治書院）、米川明彦・大谷伊都子編『日本語慣用句辞典』（2005年、東京堂）と王徳春編『常用慣用語詞典』（2008年、上海辞書出版社）に記載しているものである。

慣用句に表れた「手」の意味拡張を大まかに分類すると、日本語では、〈労力〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈関わり合うこと〉〈所有すること〉〈碁や将棋などの着手の回数を数える類別詞[2)]〉（以下、言語表現の意味や概念は〈 〉で括って示す）などの用法を持っている。一方、中国語では、〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈手元〉〈支配下〉〈技術や腕前などを数える類別詞〉というように意味が拡張する。

以下では、まず両言語の対応する意味を確認する。それぞれどのような拡張プロセスを経て同じ意味になったのか、その意味の拡張プロセスを提示しながら解釈する。次に、両者で対応しない意味を分析する。これらの意味はまたどのような認知プロセスに基づいて派生したのかを解明し、各自の特徴を明らかにする。

なお、本稿では、意味拡張に関与する認知プロセスについて、籾山（2002）を参考にして、以下のように定義する。

2）松本（2003）によると、類別詞は classifier の訳語として使用される用語である。ほかに分類辞という訳語も用いられる。また、国語学では助数詞という用語も使われている。日本語には「本」「匹」「台」など、数詞に付加される一連の形態素があるが、これが類別詞の一種であるという。

メタファー――二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミー――二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

シネクドキー――より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆に、より特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

2．日中で対応する意味

「手」の本来の意味は人間や動物の身体部位の一部であり、人間の場合は主に、手首から先の部分を指すが、時には「手」と言って、「腕」を含むこともある。このような基本概念や用法は両言語において対応している。人間は手を働かせて、物を取ったり、つかんだりするなど様々な行為を行う。つまり、「手」は何らかの行為を行う時に用いられる道具である。この機能的な側面に基づき、身体部位としての「手」はメトニミーによって複数の意味へと拡張する。以下では、例を挙げながら「手」の意味拡張を検証していく。

なお、本研究に用いられる慣用句の用例について、日本語のものは主に現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から、中国語のものは北京大学中国言語学研究センター（Center for Chinese Linguistics PKU）の現代中国語コーパスからの引用である。例文後の【 】内に作者及び作品名など詳しい出典を示す。また、中国語の例文の後に筆者による日本語訳を付す。

2.1 〈人〉

まず、〈人〉を表す以下の「手」を含む慣用句を見てみよう。

(1) 表通りでタクシーをひろい、病院へ着いた。木造の古い建物で、看護

婦は手が足りないなどといっていたが、いくつか病室は空いたままであった。【毎日が日曜日／城山三郎】

(2) 从这一点可以看出日本工人的素质是很高的，许多人都是多面手。

【当代／报刊／1994年报刊精选／03】

日本の工場労働者は素養が高く、多芸多才な人が多いことはこの点から見てわかる。

(1) の「手が足りない」では、「手」は〈労力としての人〉の意味を担い、〈十分ではない〉さまを表す「足りない」と連結して、句全体で〈多忙であり、より多くの人手が求められる〉さまを表す。同じ意味に使われる「手」の慣用句は、ほかにも「手を貸す」「手を借りる」などが挙げられる。

(2) の“多面手”では、“多面”は〈様々な面〉の意味であり、〈ある技芸に優れた人〉を意味する“手”と連結して、練習や訓練により、様々な知識や技芸を身に付けた人、つまり、〈多芸多才な人〉の意になる。

これらの慣用句では、「手」は身体部位そのものではなく、行為を行う時に用いられる道具を表す形式によって、行為を行う〈人〉を表している。部分全体関係に基づくメトニミーによって意味が拡張するのである。

2.2 〈手段・方法〉

次に、以下の用例を見てみよう。

(3) 最近の不景気で、ゴルフ場はあの手この手でお客様獲得に懸命です。

【国際線スチュワーデスの自分を磨く「美女」講座／小栗かよ子】

(4) 这次凶手下毒手的原因，很可能因球赛下赌输了钱，把仇恨对着运动员，造成这一悲剧。【当代／报刊／人民日报／1994年人民日报／第3季度】

今回の犯人が悪辣な手段を使って悲劇を引き起こした原因は、おそらく球技の賭けで負けて、選手に恨みを持っていたからだろう。

(3) の「あの手この手」は〈いろいろな手段〉を強調し、慣用句全体で〈物事の実現や解決のために、あらゆる手段を試みる〉意味を表す。「手」自体に〈手段・方法〉の意味が確認できる。

(4) の“下毒手”では、“下”は〈用いる〉意味を担い、〈悪辣な手段〉を

意味する“毒手”と連結して、〈悪辣な手段を用いる〉という慣用的意味を表す。「手」は形態素として複合語を構成し、それ自体に〈手段・方法〉の意味があるのではなく、〈悪辣である〉意味の「毒」と結合してはじめて〈手段・方法〉の意味を担うようになったのである。

(3)、(4) では、行為を行う時の道具を表す形式の「手」で、その行為に要求される手段や方法を表している。両者は同一の意味領域において関連しており、メトニミーによる意味拡張である。

2.3 〈腕前〉

また、次の例を見てみよう。

(5) 彼の手も上がり、やっと一人前の職人になった。(作例)

(6) 他的成就应归功于他的市场观念，他的拿手戏是瞄准小客户，而他的同行往往忽视中小客户。 【当代／报刊／读者／读者（合订本)】

彼の成功は彼の市場観念に他ならない。同業者は中小企業の取引先を無視しがちだが、彼は逆に中小企業の取引先を狙うことが得意だ。

(5) の「手も上がる」では、〈腕前〉の意味を担う「手」と〈上達する〉意味を表す「上がる」が連結し、句全体で〈芸事などの技が上達する〉意味を表す。「腕が上がる」と言い換えることができるように、「手」自体に〈腕前〉の意味が認められる。

(6) の“拿手戏”では“拿手”は〈得意〉の意であり、〈劇〉の意味を表す“戏”と連結して、〈得意な演目、十八番〉という慣用的意味を表す。この慣用句はもともと役者の芝居における得意な演目を意味したが、〈得意技〉の意味として今ではほかの分野でも広く使われている。「手」自体に〈腕前〉の意味があるのではなく、〈取る、持つ〉などの意味を表す“拿”と結合して、全体で〈巧みに手が働くこと〉(〈技術〉) の意味を表しているのである。

(5)、(6) の「手」は行為を行う時の道具を表す形式で、その行為に要求される能力や技術を表している。両者は同一の意味領域において関連しており、メトニミーによる意味拡張である。

以上、日本語と中国語の慣用句において、構成要素の「手」が関わる意味

として、〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉が挙げられ、この三つの意味が両者の間で対応していることを確認した。

2.4　対応する意味の拡張プロセス

従来の指摘によると、身体部位詞の本来の意味から別の意味への拡張には主に、比喩の生成プロセスとしてのメトニミーが関与している（田中2002、有薗2013）。有薗（2013）は、身体部位詞「目」「耳」「鼻」は行為のフレーム[3)]に基づくメトニミーによって複数の意味に拡張していることを論じている。行為には、その行為をする人、行為に用いる道具、行為の対象、行為に要求される方法、その行為を順調に行うための能力や技術、そしてその行為の結果産み出される生産物など、様々な要素が関わり、行為に関わるこれらの諸要素は、ひとまとまりの知識構造、すなわち、行為のフレームを形成している。そして、我々が何らかの行為を行う際、身体部位が様々な行為の道具として機能するため、〈道具〉としての身体部位を表す形で、行為のフレーム内のほかの要素を表すことができる。

有薗（2013）が提示している行為のフレームは「目」「耳」「鼻」だけでなく、「手」の意味拡張にも問題なく当てはまる。つまり、「手」は何らかの行為に用いられる道具を表すことから、その行為を行う人、その行為に要求される方法、その行為に要求される能力や技術[4)]へと意味が拡張する。それぞれの要素は身体部位詞「手」の行為のフレームにおいて関連しているため、

3）フレーム（frame）は認知意味論における中心的概念の一つである。この用語は、もともと人工知能関係の研究において使用されてきた用語であるが、フィルモアによって意味論に導入されたものである。類似の概念を表すものとして、レイコフは理想化認知モデル（Idealized Cognitive Model）、ラネカーは認知領域（cognitive domain）という用語を使用している。詳細は松本（2003）、有薗（2013）を参照。

4）有薗（2013）では、行為のフレームにおける能力と技術という二つの要素を区別している。例えば、「目がいい」の「目」は〈視力〉の意であり、視覚行為のフレームにおいて、視覚行為に要求される技術ではなく、（能）力に対応する。従って、この二つの要素を区別する必要がある。しかし、「手」が拡張した〈腕前〉に関しては、能力とも技術ともみなすことができるため、本稿では両者を区別せずに、統合して扱うことにする。

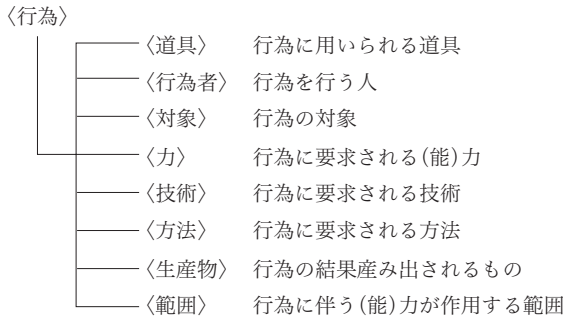

図 1　行為のフレームにおける諸要素（有薗2013、p. 126 より引用）

〈道具〉の「手」を用いて、ほかの要素を表すというプロセスはメトニミーによる意味拡張である。

メトニミーの基盤となるのは参照点能力である。参照点能力とは、我々はある対象を把握する、あるいは指示する際に、その対象を直接把握するのに何らかの困難を伴う場合、別のより把握しやすいもの、あるいはすでによくわかっているものを参照点として活用し、本来把握したい対象を捉えるという認知能力である（籾山2002）。

我々が何らかの行為を行う時に用いられる方法、またその行為に必要な能力や技術は抽象的であるため、より把握しにくい対象である。ある行為を行う時、人間の体において機能的に働く「手」が顕著な部位であるから、道具の「手」が優先的にメトニミーの媒体として選ばれ、行為の行為者、方法、そして能力や技術を表すのである。我々人間はこのようなフレームの知識を共有しており、それを言語に反映させているため、異なる言語間において同じ意味拡張が起こるのも当然のことである。

3．日中で対応しない意味

両言語では、上述のような共通している意味以外にも、各自特有の意味が見られる。これらの意味拡張にはまたどのような認知プロセスが関わってい

るのか、本節では、この問題について考えてみよう。

3.1　中国語にない日本語の意味

以下の用例を見てみよう。

(7)　特に、先に触れたような自制心を失わせるほどの魅力をもつ薬物ときっぱり手を切ることが、治療や援助もなしに「本人の決心」だけで簡単にできるとは考えられません。【21世紀に飛翔する社会福祉／山野尚美】

(8)　日本を含めた多くの国で、今や元気で優秀なのは女性である。学歴を手に入れ、仕事を手に入れ、美しい身体や顔を手に入れ、料理の腕を上げ、教養を高め、ファッションセンスを磨く。

【世界一ぜいたくな子育て／長坂道子】

(7) の「手を切る」は〈それまでにあった関係を断つ〉意であり、「手」は〈関わり合うこと〉を表す。また、(8) の「手に入れる」の「手」は〈所有すること〉を意味する。

第 2 節では身体部位としての「手」の機能的な側面に注目した。われわれの日常生活の中で、手はパソコンを打ったり、字を書いたりするなど何らかの行為を行う時に機能的に働く。また、物を持つことや対象に接触することも手の機能である。物を持つ機能に基づいて、〈所有すること〉へと意味が拡張し、物体に接触する機能に基づいて、〈関わり合うこと〉へと意味が拡張する。行為のフレームからみると、行為に用いる道具としての「手」を表す形式によって、行為が生じる結果を表す。つまり、これはメトニミーによる意味拡張である。

3.2　日本語にない中国語の意味

以下の用例を見てみよう。

(9)　也就是说，人才都是择贤主而归附的，因为人才只有在一个好老板手底下才会实现自己最大的人生价值。

【当代／电视电影／非文艺／易中天品三国】

つまり、人材は賢明な雇い主を選んで身を寄せるということだ。それ

は、優秀なボスのもとで仕事をしてこそはじめて価値ある生き甲斐を得ることができるということだ。

(10) 他说：最近我确实没钱，月底了，手头紧得很，下回你点饭店我买单。

【当代／文学／你以为你是谁／池莉】

彼は言った。最近俺は本当に金がないんだよ。月末で懐が寂しいから、今度こそお前に店を決めてもらって俺がおごるからな。

(9) の“底下”は一般に物を表す名詞の直後に用いて、具体的な何ものかの〈真下〉や〈根本の部分〉を指すが、そこから転じて抽象的な〈下〉〈もと〉の意味を表すことがある。“手底下”は具体的に〈手の下〉にあるものを表すこともあるが、ここではある人の〈指導下、支配下〉にあることを表す。「手」は行為を行う時に用いる道具から〈支配の及ぶ範囲〉へと意味が拡張する。第 2 節で見たように、これは行為のフレームに基づいて、メトニミーによって拡張した意味である。

(10) では、“手头”の“头”は“里头”（裏側）、“外头”（外側）の“头”と同じように、意味を失い、接尾辞として位置や方角を表す語の後に付ける。“手头”は〈手元（にある仕事、株や金など）〉を意味するが、ここでは、〈手元にある金〉の意味のみに限定し、本来〈きつい〉意味として使われる“紧”と連結して、句全体で〈懐具合が悪い〉という慣用的意味を表す。身体部位としての「手」は自由に広げたり、伸ばしたりでき、人間が自分の身体を基盤にして位置や方角を示す時、「手」は顕著な部位として際立つ。〈手元〉は、「手」のそういう位置的な側面に焦点化し、メトニミーによって拡張した意味である。

3. 3　周辺的な用法

最後に、両言語の慣用句における「手」の周辺的な用法を確認する。

(11) どうやらディートリッヒは、また出直すなどということは考えず、押しの一手で、メアリーが YES というまで説得を続けたようだ。

【愛しのマレーネ・ディートリッヒ／髙橋暎一】

(12) 他对自己调配的酒非常满意，常常要向亲朋好友露一手。

【当代／文学／二战全景纪实／沈永兴、朱贵生】

彼は自分の調合した酒が自慢で、よく親戚や友人にその腕を披露する。

(11)、(12) の「手」は類別詞として慣用句に現れている。「押しの一手」の「手」は碁や将棋などの着手の回数を数える類別詞として使われ、慣用句全体で〈目的をとげるために、相手に対して自分の意志を貫き通す〉ことを意味する。(12) の“露一手”では、〈披露する〉意味を表す“露”、〈ちょっと〉の意味を担う数詞“一”と技術や腕前などを数える類別詞の“手”が連結して、〈腕前〉を表す目的語を省略し、慣用句全体で〈ちょっと（腕前を）披露する〉という慣用的意味を表す。何らかの行為を行う時の道具で、行為それ自体を数えるという用法は、日本語と中国語の両方に見られる。管見の限り、中国語の身体部位詞のこの用法が日本語より多く見られる傾向がある。本稿では、詳しい考察を省略し、言及することにとどめておく。

おわりに

慣用句に表れた「手」の意味拡張を分析した結果、日本語では、〈労力〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈関わり合うこと〉〈所有すること〉〈碁や将棋などの着手の回数を数える類別詞〉などの用法を持っている。一方、中国語では、〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉〈手元〉〈支配下〉〈技術や腕前などを数える類別詞〉という意味拡張が起こる。このように、両者の間に異なる意味拡張が見られる。しかし、身体部位を表す「手」から〈人〉〈手段・方法〉〈腕前〉へと意味が拡張されることは共通している。つまり、メトニミーに基づき、「手」は何らかの行為に用いられる道具を表すことから、行為のフレームにあるほかの関連する要素、すなわち、その行為を行う人、その行為に要求される方法、その行為に要求される能力や技術を表しており、両言語において、拡張のプロセスは同じであると言える。

一方、相違点を分析した結果、日本語の〈所有すること〉〈関わり合うこと〉は行為のフレームにおいて、メトニミーによって行為の結果を表してい

るのに対し、中国語の〈支配下〉は行為のフレームにおいて、メトニミーによって行為の伴う力が作用する範囲を表し、また〈手元〉は位置的な側面に焦点化し、メトニミーによって拡張した意味である。それぞれの意味拡張は図 2 に示すネットワークを形成している（周辺的な用法を除く。実線の矢印はメトニミーによる拡張を表す。斜線部は両言語が共通している意味拡張である）。

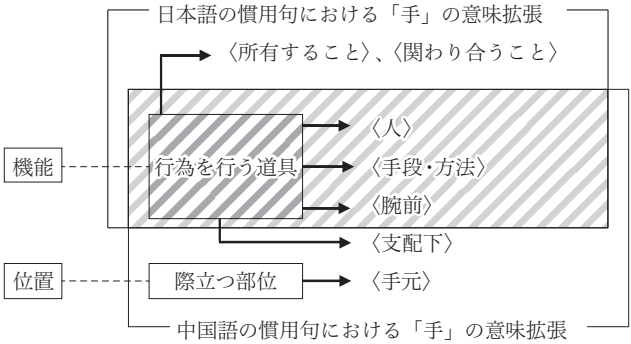

図 2　日中慣用句における「手」の意味拡張

図 2 からみると、機能的な側面に焦点化した意味拡張が慣用句に現れる「手」の意味の中核部分をなしていることが分かる。両言語の共通している意味も「手」の機能に注目して拡張したものである。このように、機能的な側面に重点を置いているということは、機能的に働く「手」の身体における重要性によるものであろう。

今回考察した結果、日中慣用句における「手」の拡張した意味同士には行為のフレームにおける関連性がみられ、そして、基本義から派生義までのプロセスについて、両言語は同様であるという結論に至った。また、身体部位詞「目」に関しても、やはり同様の結論が導かれる[5)]。つまり、有薗（2013）が提示した行為のフレームは、日本語の身体部位詞の意味拡張のプロセスが

5）呉琳（2014）を参照。

明らかになるだけでなく、中国語の身体部位詞の解明にも適用可能である。

付記：本研究は陝西省教育科学「十三五」規劃2018年度課題「移動環境下的日語習語学習資源建設研究」（SGH18H006）及び西安交通大学2018年本科教学改革研究青年項目「多模态视角下的词汇学教学策略研究」（1802Q-03）の支援による研究成果の一部である。

参考文献

有薗智美（2013）「行為のフレームに基づく『目』、『耳』、『鼻』の意味拡張―知覚行為から高次認識行為へ―」『名古屋学院大学論集言語・文化篇』第25巻第1号，pp. 123–141.
呉琳（2014）「身体部位詞の多義性とその習得―視覚器官〈目〉の日中対照を通して―」『言語文化教育研究』第12巻，pp. 187–197.
呉琳（2016）「日本語の慣用句に関する研究の概観」『日中語彙研究』第6号，pp. 87–105.
田中聡子（2002）「『口』の慣用表現―メタファーとメトニミーの相互作用―」『言葉と文化』第3号，名古屋大学国際言語文化研究科，pp. 5–20.
松本曜編（2003）『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修『シリーズ認知言語学入門』第3巻，大修館書店.
籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』町田健編『シリーズ・日本語のしくみを探る5』研究社.
王丽莉（2007）《关于“手”多义性的中日对比研究》吉林大学硕士学位论文.
卢小英（2010）《手的惯用语之中日对比》《文教资料》2月号，pp. 53–55.

利用したコーパス

国立国語研究所コーパス開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（中納言）https://chunagon.ninjal.ac.jp/（最終アクセス日2019年4月7日）
北京大学中国語言学研究中心『現代漢語語料庫』http://ccl.pku.edu.cn/corpus.asp（最終アクセス日2019年4月7日）

呉琳　Wu Lin　西安交通大学外国語学部助理教授　専門：慣用句論、コーパス日本語学